OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期実証主義と現象学 : 経験論的現象主義と超越論的現象学との間
Author(s)	板倉, 代志彦
Citation	メタフュシカ. 2003, 34, p. 53-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66679
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初期実証主義と現象学

——経験論的現象主義と超越論的現象学との間——

板倉代志彦

一　生活世界論と経験論の伝統——プラトン主義的現象学の終焉の反形而上学的背景

ヘルマン・リュッベはその著『歴史における意識』（一九七二）[1]のなかで、フッサールの現象学の成立に決定的な影響を及ぼしたマッハの現象主義をはじめとする初期実証主義の遺産が世に忘れられ、閑却されるに至った理由のひとつとして、ドイツ哲学の「反経験論的な自己了解」を挙げている。この著作は現象学のプラトン主義の終焉を認める立場にたつ著者が一般に対してフッサールと初期実証主義との関係の重要性に初めて注意を促したものであるが、これに続くマンフレド・ゾンマーの『フッサールと初期実証主義』（一九八五）[2]は『算術の哲学』（一八九一）に代表される前現象学期から『イデーン』第一巻（一九一三）の時期にかけてのフッサールの思想形成の過程でマッハとアヴェナリウスが果たした役割を分析して相当程度の解明に成功している。周知のように実証主義に対する哲学の反抗を最も決定的にしたのは一九二七年の『存在と時間』であり、その影響は現代に及ぶ。これに対してフッサールは『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』[3]（以下『危機』と略。原型となった講演は一九三五年）で特に第一次大戦後「単なる事実学」への傾向に対する評価の逆転が避けられなくなったことを指摘しながら、敵意に満ちた気分にある若い世代の形而上学的な問いかけに対して自らの立場をもって答えようとしていた。一般に彼の思想の展開で経験論が果たした役割の大きさは、細分化され全体を見失った諸科学に対して学以前の世界の現象を見直すことによって理想を回復すべきであると説く生活世界論での役割にお

いてのみならず、ヒュームの自然に対する現象主義的アプローチがカントに優越するとみる超越論的論理学の論点（FTL, S.272）などにおいても明らかである。しかし成立期以来のヒュームや初期実証主義との関係が適切に理解されることによってフッサールの現象学が一貫して経験論の伝統との対話を契機として展開されたものであったという事実がはじめてその深い意味とともに洞察されることとなろう。この意味において一方では経験論的現象主義の感覚論からの影響とこれに対する距離において（フッサール）、他方また一八九〇年代に始まる実証主義に対する反逆の一環として（ハイデガー）、ドイツ現象学が成立したという歴史の意味するところを正確に見さだめておくことは、岐路に立つ現代の思想状況に照らしても重要な作業であるといえると思う。

基礎存在論の時期のハイデガーが形而上学の復興を企てたとすれば、ヒュームとカントを念頭におきながらデカルト的二元論の克服を図った『危機』のフッサールは、人類に「生得的」な理性を想定する先験主義の立場にたちながらも決して実証主義的感覚論や「物理学主義的運動」（ウィーン学団など）を否定したのではなかった（K,§11,vgl.Hu22,S.148ff., Hu9,S.302）。それどころかデカルト的二元論の裏面として近代哲学に君臨する超越論的主観主義と物理学的客観主義の対立を批判して自ら『イデーン』期の意識の実体概念を捨てた彼は、数学的思考から出発する合理論者に対する経験論者のメンタリティの相異について次のような注意をうながしている。経験論には学問的に未知であっても日常的に親しまれている歴史的、文化社会的な「生活環境世界」（Lebensumwelt）を発見する傾向がもともと含まれていたのだと（K,SS.446-450; vgl.S.140）。最後まで経験論の流れに与することのなかったハイデガーの場合とは対照的に、それは数学研究から出発しながらも自らの世界観と人間観を改めるにいたった現象学者の劇的な回心の言葉であった。

とはいえブレンターノが一貫して認識論的実在論の基盤にたっていたとすれば、現象学の誕生を告げる『論理学研究』（以下特に断りのない場合は同書初版［一九〇〇／〇一］を『論研』と略記）はある留保のもとですでに経験論的現象主義と共通の基盤から出発していたことも認識されなければならない。しかるにこのような枢要な観点からみた現象学の成立の理解やその際初期実証主義が果たした役割についての議論は、右に挙げたゾンマーの著作にもみられない。そこで本稿は以下において（一）フッサールによる現象学の構想が『論研』における発足当初から初期実証主義の感覚論、特にマッハの感覚要素一元論を下敷としていたことを示すとともに、この事態の解明が現象学の展開の全体像に対して有する射程を主題的に究明することに意を注ぎたい。現象学に対す

るこの理解のもとでは、(二)継いでフッサールはマッハから益々離れていくとともに『イデーン』第一巻にみるような外的世界の実在を前提しないひとつの観念論の立場に移ったこと、しかし(三)自らの立場から感覚の分析が継続される過程でマッハ/アヴェナリウス、ヒュームに対する一層積極的な評価の観点が確立されていくとともに『危機』に至っては「デカルト的二元論の克服」という基本構想自体マッハらに対する現象学の根本的な負債を前提するものであったことなどが推定可能となる。現象学の展開におけるアヴェナリウスやヒュームとの関係の意義は今回これを主題的に取り扱う暇がないが、初期実証主義の感覚論に関連するこれらの論点に加え、筆者は現象学がカントの功績である批判的観念論の要求に対しても一定の責務を負うものと考えて右のようなフッサールの思索の展開の方向が徹底された場合の一つの帰結を示唆するとともに、ハイデガーの想像力一元論の立場に対する批判の根拠をあわせて提示するよう努めたい。その場合問題となるのは、(a)物自体の想定を背理とみなす現象学においても統覚は感覚と外的な物の知覚的経験を前提するとすれば、そのことは正確にはどのような事態を意味しているか、(b)また「物自体」が現象におきかえられてもその無限性には達し得ないのではないか、普遍学の理想(純粋論理学あるいは形式存在論)と有限理性との関係をどのようにみるか、などの観点である。

『危機』の時期のフッサールは『論研』以来の生物学主義批判の立場を放棄し、具体的世界の全体に妥当する生物学と、普遍的哲学としての現象学との一致を信ずるようになっていた(K.S.484)。彼のこの転回の背景にあったのは数学と物理学を拠所として近代哲学が掲げてきた認識の普遍性と合理性の理想をもはや無限に押し拡げることができなくなったという自覚である(K.S12)。彼もこの時指摘したように普遍学が一般的なもののみならず個別的なものまで合理的に決定することを期待するならば、この学が全知であることを期待していることになる。しかし彼によれば近代の哲学者たちは認識を増大させ環境に対する支配を完全なものとしていくことによってそのような目標を実現することを望んだのであった。だがそうなれば、この学が完成された暁に個性的人格とその自由はイデアのまえに仮象と化し、帰納的推理もはや必要とされず、フッサールの言うように人間は神の似姿であるばかりか本来神とは「無限に遠い人間」であったことにならないだろうか。

このような視座との関連で注意されるべきことは、フッサールは自らの現象学的経歴を範疇的諸対象の構成の研究から始めたという点である。確かに純粋論理学は学問的理論一般の基礎として演繹的体系の理論構造を分析せねばならないし、

従来の学問の還元主義的な立場にあっては例えば生物種や自然法則の発見の場合のように個別的所与そのものよりもそれらのなかから一般的関係（一般性）を抽象することのほうが重視されてきたことも事実である。だからハイデガーの存在論の構想とは対照的に、フッサールが領域存在論を構想した時「このもの」を再び各学問領域の問題に還元しようとしていたことも頷ける。だが一方では本質的なものの看取が個々のサンプルにもとづくことを必要とする限り、経験的認識における帰納的推理の必然性に加え、その推理の基盤が観察者の個体的直観とその対象だけではなく、端的な感覚そのものにあることを否定できない。さらに現代では例えば生物学のような学問において、個体の分類の根拠が得られない多数の例に直面するなどの事実とともに、そのいくつかの理論は個体の種に対する優位を認めて分類そのものを放棄しているし、人類学などでも国際間の交通とともに文化や国家の枠組みを越える新たな人間理解の観点が必要とされている。[4] このように諸々の学問分野において還元主義の行き詰まりとともに個体の問題がその重要度を高めていることにも注意を促しておきたい。

二 『論理学研究』の背景——実在論（ブレンターノ）対現象主義（マッハ）

ここではまず当該の議論の基礎となる論点を提示するとともに、次節で詳述するように前述の（一）の観点からフッサールの現象学の展開の全体像を見直す場合、あわせて問題となる（二）と（三）の点について予めその概略を示したい。形而上学の乗り越えの方途を問うことは今日なお現象学にとって優先的な課題であるが、その場合問題となるのは形而上学の前提をなす実体の概念とともに、その二元論的前提、すなわち精神と自然、心と物、主観と客観、あるいは個と普遍などの二元性をどのように解するかである。マッハの『感覚の分析』の影響を指摘したリュッベが述べたように、フッサールにとって初期実証主義の魅力は特に認識論的二元論を乗り越える道を示唆するところにあったものと思われる。他方マッハの思想の基底をなす感覚要素一元論が現象主義的であると同時に科学的還元主義や要素還元主義を採らず、全体論（ホーリズム）的性格を有するといわれている点は本論考において特に重要である。

ヒュームの再来といわれたマッハはヒュームと同様精神的

実体を消去し、これを現象の束に還元するが、『論研』はこのような経験論的現象主義の立場との対話のもとで感覚と作用の心的諸体験の「束」――すなわちこの時期の現象学的自我――を意識の存在として想定している。サルトルやメルロ＝ポンティなどフランスの哲学者を魅了した現象学的体験の概念はだから実はヒュームやマッハの現象概念に由来しているのである。ただしフッサールは体験された感覚諸内容が統覚（あるいは統握、解釈）されることによってはじめて対象とその性質が現出するものと考えて、彼らの現象主義から自己の立場を分かつ。そこで同書を通じて頻繁に言及されるマッハの「感覚複合」の考えも消極的な評価を与えられることになる。彼の感覚一元論が第五研究第二節や第七節で批判されたのは感覚内容と知覚対象、現出と現出する対象の区別を看過したという理由からであった。だからこの点とともにその反自然主義的傾向を重視するならば、現象学によって自らの自然的生を対自化するところに生きられる精神に固有の実存とそのドラマが救われたとみる解釈も行われることになる。

だがこの点にもかかわらず、ブレンターノが物的現象を外的知覚の対象とすると同時に心的現象を専ら内的知覚の対象とみなしたのとは対照的に、『論研』附論でブレンターノを批判するフッサールが「内的知覚と外的知覚は、これらの術語をごく自然に解する限り、認識論的には同じ性格のものであると思われてならない」（LUII,S.760.）と述べたのは何故だっただろうか。物的現象も心的現象も同じく意識に内在するとみるフッサールは、また現出する外的事物の理念的性質の各類（色や形など）をそれに類似したものとして感覚の側に存立する各類（感覚される個々の色や形など）から区別して、前者の意味での「外的」とは空間的な意味に理解されてはならないと注意している。「ともかくわれわれが強調するのは外的という点であり、しかも勿論この言葉は空間的な意味に解されてはならない。現象学的な外的事物の実在または非実在の問題に、たとえどのような結論が下されるにせよ、そのときどきに知覚される事物の実在性を〈知覚された感覚複合が、知覚する意識の内部に実在すること〉という意味に理解してはならないことは明確である。（…）…感覚複合の客観的な対象化的統覚こそが知覚的現出の本質をなしている。[5]」（LUII,S.707）このようにして自らの客観化作用の概念を「意識の内部」の実的成素から区別してみせる『論研』は内と外の形而上学的区別を否定するマッハの洞察と言語を逆手にとり、マッハ自身を批判する体でブレンターノの心的現象の概念を批判したのではなかったろうか。

アヴェナリウスに接近して非本質論的現象学が試行された一九一〇／一一年（Hu13, SS.111-194）にはひとつの感覚主義的還元の試みが流産に終わっているものの、この時大綱と

してフッサールは後の種々の現象学的還元の構想を予想させる立場にあったといえる。とはいえその同じ意識内在主義の立場が、個物からなる外的実在の世界が無と化しても絶対的意識は残ると論ずる『イデーン』期の本質論的な超越論的主観主義の立場をとるか、初期実証主義の遺産を背景として生活世界論におけるようにデカルト的二元論そのものを越えようとするかでは、内実においておよそ雲泥の差を生じる結果となったのである。

事実例えば一九二五年から一九二八年までの間に書かれたとみられているある草稿では、デカルトの伝統に拘束されたその世界理解が『存在と時間』の著者との間に確執をもたらした（vgl.Hu9,S.601f.）『イデーン』期の意識の実体概念が改められ、予め構成されて与えられた諸統一としての「非我」(Nicht-Ich) ――ヒュレー――なくして自我は不可能であるといわれている（Hu14,S.379; vgl.S.380）。その統覚理論は世界を自我に対する志向的な極として理解する一方で（ヘルバルトの統覚理論を継承するかたちで志向性の概念と自我論が構築されている）、現象学は超越論的主観性の実体概念を大きく変更して各々の要素は相互の連関を離れて自存することがないとみるマッハの要素一元論に適合する姿勢を示すようになっていたのである。さらに『経験と判断』（vgl.§14）ではフッサールはハイデガーにおける世界内存在の思想にも匹敵するものとしてアヴェナリウスの純粋経験の世界を自らの立場で表現しようとしているが、このような立場の変更にともなって環境世界（生活世界）や大地は自我の作用や反省の前提として常に予め与えられることが承認されることになる。現象学のこのような際立った変貌が初期実証主義へのひとつの回帰をあらわすとすれば、その際フッサールがマッハらの思想を観念論の立場から同化しようとしていたと述べるのはその内実からみて妥当でないことになる。何故ならば自我がなくても感覚が存在するのではないとしても、感覚がなければ自我は不可能であることが認められているからである。この事態は自我と時間の流れとの関係についてK・ヘルトがその著『生き生きとした現在』で分析してみせた逆説を別のかたちで――だが『論研』における現象学の成立のあり方からみればこの逆説の真相を最も直截に物語る形で――表現していることになる。言い換えれば、マッハらの立場やW・ジェームズの心理学などをも参照することのできる時間の根源的な流れ――感性の根源的受動性――と自我との関係（あるいはゼーフェルト草稿などで問題とされた過去把持との関係）、フッサールの思想形成に最も本質的な影響を及ぼした二つの大きな流れである、十九世紀の実証主義的経験論とヘルバルト派の統覚理論の流れの対照に由来しているのである。

もし『論研』のフッサールがマッハの要素一元論とともにその反形而上学的前提の帰結をすべて受け入れていたとすれば、現象そのものには内と外の相違がないばかりか、主観がなければ客観はないが、逆に客観がなければ主観はないということも承認することになったはずである。ところがそのような立場は観念論でないかわりに現象をイデアールなもの（理念）の現われとして理解することを不可能にしてしまう恐れがあったであろう（実際には現実存在は本質直観を許容すると同時にそれ以上のものとして現象することを承認する道もあったとしても…）。他方『イデーン』期のデカルト主義は『論研』の時期のフッサールがマッハらの実証主義的感覚論をデカルト的二元論に対する批判の観点から評価していたわけではなかったことを証拠だてている。だがそれにもかかわらずブレンターノから別れて現象学が現象学となるためにはマッハが必要だったのであり、おそらくマッハらの存在こそやはり現象学にとって決定的だったのではないだろうか。[6]

それゆえ次節で批判的に検討する『論研』の思想構造は次の見方をも支持することになるであろう。すなわち先に示した、ブレンターノによる内と外の区別を斥けて現象学の基本的立場を表明する巻末の附論「外的知覚と内的知覚。物理現象と心的現象」――その見出しはまた「物理的なものの心的なものに対する関係」を論じたマッハの『感覚の分析』を連想させるが――にも示唆されているように、現象学を成立せしめた最も基底的な条件は、マッハの感覚論が評価されるとともに、その同じ評価の視点が心理学主義批判という別の観点からイデア的なものの現象学のために流用されたところにあったのではないか。

三　現象と個体の超越――『論理学研究』における初期実証主義の遺産からみて

現在のところフッサールと初期実証主義の関係を主題とした研究の第一人者であるマンフレド・ゾンマーの所見を含めて、初期フッサールの哲学の立場が積極的な意味でマッハの影響下にあったとみられているのは『論研』第一巻（『序説』）に先行する心理学主義の時期までであり、別けても『算術の哲学』においてではないかと思われる。しかしながら本稿で提示する論点からみればフッサールの思索は『論研』第二巻においてもまだ予想以上に初期実証主義に負うところが大きかったと考えられる。それでは実証主義的、また一般に経験論的契機は、そこでどのような位置をしめるものとして理解されるべきだろうか。

この問題の詳細に立ち入るまえにまずフッサールの代表表象理論の若干の特徴に留意しておきたい。心理主義に対抗す

る『論研』は術語としてカントのものを導入し、範疇直観を悟性、感性的直観を感性と呼ぶ。だが「端的な感性的直観は、実に多くのさまざまな感性的性質や感覚可能な諸形式などを代表表象の諸目的に利用できる。集合の直観や同一性の直観などの領域においては（…）〈と-形式 Und-Form〉や〈である-形式 Ist-Form〉などはいかなる場合も同じである」（LUII/6,§55,S.699）なども言われるように、ヒューム、ロックなどの経験論を参照してこれらと対決しながら、感性と悟性、経験論とカントや合理論の伝統をつなごうとするうえで重要な役割を演じるのがこの代表表象理論である。殊に第六研究では、感性的概念の場合を含め一般に対象の概念は抽象の作用ばかりでなく「関係」の作用を前提する限りですべて範疇的概念であるとされ（LUII/6,§58,S.709）、範疇的綜合がヒュームのいう'relations of ideas'として理解される―フッサールはカントのようにこれを分析判断とは解さない（Hu7,S.351ff.）――ことをうかがわせる（vgl.I.Kern,*Husserl und Kant*, Den Haag, 1964,S.18.）。また一般に命題の構文形式をふくむ範疇的形式化は客観化作用の普遍的本質に基づくともいわれている。一方カントにあっては悟性が感性的直観からつくる知覚判断はまだ経験判断ではなく、ただ知覚を感性的直観において与えられるとおりに結合するにすぎない（『プロレゴーメナ』第二十一節）とすれば、フッサールでは狭義の知覚の対象である個体的存在、すなわち時間的存在の直観が、特別の問題となっていた。カントにとって知覚のうちで単に主観的にとどまるものが客観的に（意識一般に）妥当するためには、感性的直観が比較によって一般的なものとされ、論理的に判断されることが必要である。しかしフッサールは範疇直観を論じる際にもそれが前提する感性的直観を分析し、またこの後者が対象とする個体を扱う場合にもその学的本質を問うかわりにその時どきの識別に必要な「一定量の規定的徴表」の知覚を想定するなどの経験論的観点に立っていたことは、一般に『論研』という著作が「存在論的なテーマをもたなかった」こと、「可能な意識の諸対象についてアプリオリな論定を立てようとしなかった」（LUII/6,S.765 改訂版；邦訳二六九頁）ことのあらわれである。意識の志向的綜合を研究する新たな立場から（vgl.K,S.237）「数学、自然科学および形而上学の《批判的》救済」を目指すカントが形而上学的認識論の航路にはまりこんでいることが嘆かれた時、すでにフッサールは事実上「論理以前の客観化」（LUII/6,§66,S.732. 改訂版）の領域を承認していたのである。

では少し長くなるが、次に『論研』の構想の最も基底的な構造を検討する意図からも、この代表表象理論の骨格をあらわとなす箇所を第六研究の第五八節と第六二節より引く。

「…内的知覚のうちに感性的に与えられている（したがってそこでは感性的な代表として機能している）同じ心的諸契機が、範疇的知覚または範疇的想像の性格を有する基づけられた作用の中では、範疇的形式を構成することができ、したがってここでは［当初の感性的代表とは］全く別の範疇的代表象の機能を果たしうる。（…）…しかしすべての作用性格は究極的には外的な感性的諸内容に基づけられているのであるから、感性の領域には、本質的に現象学的な区別が存立していると言える。そこでまず第一に

（一）反省内容とはそれ自身作用性格であるか、もしくは作用性格に基づけられている諸内容のことであると定義され、次いで

（二）第一次内容とはあらゆる反省内容を直接または間接に基づけている諸内容のことであると定義される。この後者は《外的》感性の諸内容であろう。ただしこの場合の外的感性というのは、外と内の相違（このような相違は形而上学的相違である）との関係によって定義されているのではなく、究極的な基づけを行う心的諸内容としての、感性自身の諸代表によって定義されているように思われる。これら第一次的諸内容は唯一の最高類を形成しているのであり、そしてこの最高類がさらにいろいろな種に分かれるのである。反省内容が第一次的諸内容によって基づけられる仕方は、明らかに考えられる限りで最も自由であり、したがって反省内容がそれよりも狭い第一次諸内容の類に拘束されることはありえない。」（『論研』第六研究　第五八節　訳書　二〇七-二〇八頁）

「…しかしこのような範疇的な統一と形式化の自由がいかに大きいとはいえ、やはり　それにも法則的な制限がある。（…）勿論いろいろな関係点の間のあらゆる関係や、一般にいろいろな素材に基づくあらゆる形式を》考える《ことは――すなわち単なる表意の意味でそれらを考えることは可能である。しかしわれわれは、どのような基盤に基づく基づけをも現実に遂行できるというわけではなく、感性的な素材を任意の範疇的形式にあてはめて直観することはできない。…」「…知覚によってにせよ想像によってにせよ、ともかく任意の予め与えられた素材が事実上範疇的にどのように形式化されうるのかということ、すなわちその素材を構成する感性的直観に基づいて、どのような範疇的作用が行われうるのかという点については――いま問題にしているイデア的諸条件すなわち分析的諸法則は何も語らない。」（同　第六二節

訳書二一五頁および二一七頁）

まず第五八節であるが、反省内容を基づける諸内容である「第一次内容（die primären Inhalte）」についてこれは「《外的》感性の諸内容であろう（Dies wären...）」と言われているところでは接続法が用いられ表現に含みがある。これが巻末の附論で批判されるブレンターノの外的知覚の概念に間接的に言及するものであることは間違いないであろう。しかし他の部分の叙法はすべて直説法である。『論研』第一巻においてはマッハの立場やアヴェナリウスの経験批判論が彼らの思惟経済説とともに心理学主義（相対主義）として批判されたのであるが、他方全著作を通じてここではじめて内と外の区別が形而上学的区別にすぎないという論点が明らかにされている。しかもこの第一次内容の概念は大方の読者にフッサールの現象学が観念論に移行したとの印象を与えた『イデーン』第一巻（Hu3,385）でも再び導入されており、『論研』の後のあらゆる変更にもかかわらずここで議論される第一次内容と反省内容の区別に相当する区別がそこでも行われている。『イデーン』で「感性的ヒュレー」、「感性的素材」などと呼ばれるこの概念は、だからフッサールの現象学にとって決してかりそめのものであったのではなくそのつどの文脈で一定の役割を演じていたといえる。だがそもそも現象学のこの概念の由来はどこにあるだろうか。

初期実証主義の感覚論から見れば個々の感性的要素、例えば今私が感じている光は私の内にあるのでも外にあるのでもない。初めからそれは私の「頭のそと」にあるからそれを「外的」感覚と呼ぶのはさしつかえないことにもなるであろう。こうして例えばアヴェナリウスは、人はなぜ外的世界が実在すると信じるのかと問うかわりに、逆になぜ人は外的世界が実在しないと信じるのかと問うのである。フッサールは『論研』や『内的時間意識の現象学』（附論Ⅴ）において統握とは感覚与件の「生化」（Beseelung）であるとみて "beseelende Auffassung" などの語をもちいているが、ゾンマーがすでに指摘したようにこれは主観と客観、意識と存在、心と物などの形而上学的カテゴリーを純粋経験のなかにもちこむばかりか、物的事象のうちに心的な性質を移し入れる霊化（アニミズム）のはたらきでもある、かの「投入作用」（Introjektion）の概念を参照した用語である。しかしアヴェナリウスにとってはこの投入作用によってもたらされたものを「排去」（ausschalten）することが問題であり、「純粋経験」を回復しながら「自然的世界概念」を記述することが関心事であったとすれば、フッサールはこの還元の概念を含めて事象に対するアヴェナリウスの理解を自らの立場から逆用すると同時に、投入や相互主観性に関するマッハの見解（『感覚

の分析』第三章3）に従っていた可能性を指摘できよう。ただしアヴェナリウスの自然的世界概念がマッハと異なりヘルバルトの統覚概念を継承する立場から、多様を一において綜合する或る中心的統一の思想のもとに中世の超越的範疇を導入する純粋普遍概念（存在）として構想されていた点は、特に後のフッサールにとって魅力となるであろう。

ところでマッハの感覚要素一元論は、知覚の要素論にたつヒュームの場合と比肩すべく、感性的諸要素相互間の関数的依存関係を想定するとともに一種の模写説の立場にたっている。しかも彼において模写は生得的であると同時に後天的である点が肝要である。廣松渉氏が指摘されたように、それは「決して対象的事実を原因として、これによって一義的に決定された結果なのではない。（…）…認識は模写という性格を保有しながらも、対象によって一義的に決定されるのではなく、歴史的社会的に制約され、規制され」[7]ている。この意味でマッハの模写説は常識的、相対的な意味での「構成」の概念を許容するのである。しかしこのことは逆に当の模写説に次のような二つの側面が含まれていることを意味している。すなわちそれぞれの存在者の視点の相対性とともにそれら相対的な存在者を結びつけている普遍的構造である。J・ペツォルトをしてマッハの思想をアインシュタインの理論に結びつける気にさせたのも同様の観点であるが、またこれは奇しくもペツォルトの読者でもあったフッサールが『危機』（K,§§6,36; vgl.§34b）の立論で自分の超越論的現象学を文化相対主義を越える普遍的哲学として表明することを可能にした観点でもあったのではなかろうか。そもそも実在論的である以上に叙述の観念論的側面から出立することを自認するマッハの現象主義は「意識一般」の想定に代えて私と仲間との間の「類比」を容認する（『感覚の分析』第三章2）のだが、この点でも既にフッサール自身の相互主観性の理論やアヴェナリウスから距離をとる生化的統握の考えと一致している。

本論考が検証しようとする作業仮説によれば、第一次内容（感覚、ヒュレー）の概念は『論研』における初期実証主義の遺産であり、これによって現象学はその発足以来特にマッハの経験論的現象主義を基底としていたことになる。後の第六十二節では範疇的形式化を制限する素材（第一次内容）の非恣意性と反省内容に基づく範疇形成の自由の相対性が明らかにされているが[8]、第五八節では殊にマッハを念頭におきその感覚の概念を下敷きとして範疇直観を基づけていたと考える理由がある。この意味で外と内との相違が形而上学的相違であるという――直説法で述べられている――現象学を現象学たらしめたこの根本前提は、勝れてマッハの感覚論に負うものであると考えることができる。

しかしここでフッサールが感覚そのものに志向性と意味を認めない立場に立ったことは、同時に心理学主義に対する現象学の独立宣言に匹敵する意味を有していた。この前提こそがフッサールに自分自身の現象学を創始せしめ、またハイデガーの現象学解釈に機会を与えたのである。ところが同時にこれによって現象学は、就中個物と個体化の問題にみるように、多大の困難をかかえこむことになった。後に確立される観念論としての現象学の妥当性もこの前提の妥当にかかるが、論理主義を支持しても、現象学はアリストテレスにおける判断の主語となって述語とならない実体（個物）の知覚に関しては、これを感覚（アイステーシス、ヒュレー）に依拠せざるを得ない点が問題の要所と思われる。事実これとは逆にアヴェナリウスへの接近を表明する『経験と判断』（§§14,29, 40,42,71; vgl. BEILAGE I, II）では、ヒュレーの概念にかえて受動的「原ドクサ」（Urdoxa）が導入され、この「根本的アイステーシス」が判断に先だって判断の基体（個物）を与えるとして、「自然的世界」の現象学的構想を、認識する自我の自己保存の努力とともに論じている。

最初の引用箇所に戻ろう。ここで第一次内容が意識の実的成素をなすとすれば、それの反省内容が範疇的代表として機能することによって志向的対象は統一的に把握（統握）される。任意の例をあげれば人は個別的な光や音の感覚（体験）を反省することにより、数えたり対象の理念的意味を解釈したりすることができる。こうして知覚的に与えられる現実的存在者の統覚は常に感覚から出発するが、ロッツェの論理学の影響下に、ボルツァーノの命題自体の考えに同意して理念的意味のイデア的超越性を認める『論研』は、プラトン的実念論の性格を呈している。すなわち一方において「外的」感性が意識に実的に内在するとすれば、直観は感性的に知覚される対象の志向的意味であれ、範疇的に直観される存在のカテゴリーであれ、イデア的なものを見る作用である。それゆえこの意味で『論研』の基本性格は二元論的であり、すでに観念論であると断定する人もあるかも知れない。しかしあらゆる意味を理念性とみる形而上学的前提、したがって固有名詞の意義（Bedeutung）とともに個物の志向的意味（Sinn）をも理念性としてとり扱うことは『論研』第一研究冒頭以来の立論に照らして納得できるとしても、すでに言及したように「個体的直観」の理論には全く特別の配慮（第四研究第二節参照）が必要となる。ところが世界と自己の認識の極限に位置する、分析の困難な本来の意味での個の概念は、当の個物以外にその「外延」を認めることが不可能である。この意味においてそれは一般性でも超時間的な理念でもありえず、『論研』の立場では実は理論的に破綻するのである（FTL, S.390f.）。こうしてプラトンのイデアに対して地上

に存在する個物、つまり時間的存在者としての感性的存在の超越があくまでも問われるのでなければならない。すなわち――後の時間意識の現象学はこれと違うものを求めていたにせよ――「志向的意味」（理念）としての個物ではなく「範疇的形式化の自由を制限する素材」、第一次内容として「あらかじめ与えられている」個物の超越性の問題である。

したがってこの点との関連で問題となるのは感覚と志向性の関係であり、両者の統一のあり方である。すなわち一つの理念的意味として個物が直観される場合、その直観を基づける反省内容に先行する第一次内容（経験論でいう感覚与件）が、当該の「志向的対象」としての個物とどのように関わっているかという問題である。ヒュームなどの経験論において個物は感覚的印象として一挙に与えられるとすれば、これに対してフッサールの理論では個物は常に志向性と相関関係におかれ志向的意味として「一挙に」与えられるとされる。しかしながら志向される意味が、感覚（第一次内容）において与えられているような個物の射影（プロフィール）に適合せず志向が幻滅におわることも考えられるように（vgl. Hua3, §138）、そもそも一般に個物の感覚はある意味で志向性との相関性の圏域――統覚――の外におかれることもあるのではないだろうか。また例えば人形館を訪れる人の知覚が同一の感覚的素材（第一次内容）に基づけられながらも統一的に把握される対象の意味が「婦人」と「ロウ人形」との間を動揺することがあるのを認めるとき（第五研究第二七節）、フッサールは実はこのことを承認しなければならないのではないだろうか。実際『論研』によれば「感性的諸内容は［対象を構成する］作用に特有の本質をなしているわけではなく、それらはそれらを初めて代表たらしめる統握の作用がなくても［独自に］存在しうる」（LUII/6,§57,S.703）のであり、そのとき感性的諸内容は「存在する」が志向的対象（理念的意味）は何も「現出」しない（"Sie *sind* dann, aber mit ihnen *erscheint* nichts."）とされている。

ある種の反転図形やロールシャッハテストにおけるように同じ知覚背景（地）からしかじかの対象（図）が知覚される場合を考えてみよう。このときもし知覚を基づける諸感覚の全体（素材）がそれ自体において何らの意味をもつことなく、そこに諸々の理念的関係を「書く」――あるいは「読む」、「解釈する」――ための紙のごときものにすぎないとすれば、ここからは確かに観念論的帰結が生ずることになろう。ところがいわば素材の抵抗を無視するこのような解釈は主観的観念論に陥る危険があり、事実感覚による思考の制限を含意する第一次内容の想定に反することになる。第六二節で述べられているように思考による範疇的形式化が素材の個別性によって自由を制限される点が承認される以上、第一次内容とし

て予め与えられる個物それ自身に意味や形相を認めないとすればフッサールの現象学は自己矛盾に陥ることになろう。だから無限の発見は悟性のはたらきを介するとしても、外的な個物の現実存在と相関的に自己の現存在の統覚を可能にする体験（第一次内容）こそは、経験の開放性とともにカントにおける「物自体」の批判的機能を担いながら有限理性にとってその統覚を超越する剰余としての意味をもっているのでなければならない。この観点からみれば、前節で述べたようにマッハに戻って『イデーン』の立場を放棄したと思われるフッサールが、フィヒテの自我の哲学と対照的な意味で素材（ヒュレー）を「非我」と呼んでいたことは意義深い。自我と感覚との相互依存関係を肯定するその立場は、個体的直観に直接基づけられた最低段階の範疇的綜合について「全体作用の十全性（明証）が基づける直観の十全性に関数的に依存している（...funktionellen Abhängigkeit）」（LUII/6,§57,S.704）とみる『論研』と基本的には同じ考え方に戻っているのである。

『論研』の立場がカントと同様に観念論的現象主義にあったのかむしろ経験論的現象主義にあったのかという点はその曖昧さのゆえに判別し難く見えるかも知れない。だがフッサールは感覚や印象を決して軽視していたわけではなかったとすれば、人はこれをどのように理解するべきだろうか。『内的時間意識の現象学』（一九〇五）の附論や補遺は「根源的印象」（「根源的感覚」）と過去把持の関係を究明しようとし、個物の個体化の原理を問うに至っていたが（vgl.Hu10,S.66, 109f.,127f.,253usw.）、彼はこの頃これらの問題と取り組んで後様々の局面で苦慮を続けることになる。だが『論研』はすでに感覚に関して感覚する働きと感覚される内容との区別が認められないとする立場にあったから、この点ではW・シュッペとアヴェナリウスらの考えを承認していたことになる。そこで問題となるのは、もし「第一次内容」のもとに理解される感覚の概念が、ヒュームの印象の概念にもまして実証主義的感覚論、別けてもマッハの現象主義を想定していたとするならば、瞬間の感覚的印象はすでに対象の相貌やアスペクトをあらわしていることにならないかという点である。

一般に地に対して図が射影的に変動するとき「スペチエスがイデア的に把捉するものによって尽くされないような諸契機の変化には、関数的依存関係の成り立つ余地がまだ残っている」（LUII/3,§4,S.234）。こうして例えば印象派が魅せられた刻々と変化する色の契機は二つの具体的な直観においてすでに同じ契機ではない。他方確かに色彩知覚の場合を含めてそれぞれの社会で歴史的文化的な理念（形相、意味）が先入見として介在するが、たとえこれとともに人はいつも「色メガネ」を通して他者や世界を見るものだとしても、現象の

そのような主観的制約の前提となる光そのもの――意味や理念の存在の前提――は自我のメガネ（習慣性）を通してつくりだされるものを越えている。それは各自の「頭の中」にあるわけではないからこそ、例えば同じ形態（Konfiguration）を見て甲がこれを「二等辺三角形」として統握するときに、乙はこれを「二等角三角形」とみて自らの認識の真理を主張することもできるのである。『論研』は客観性や空間の問題を相互主観性の観点から理解しようとしていたのではなかったが――私と仲間との間の「類比」を想定するのに加え『危機』では文化の相対性を越える生得的な可能性が示唆される――、この場合範疇形成のあらゆる相異にもかかわらず両者は予め一つの空間を共有しているのでなければならない。他方そこに見出される個物は『論研』の意味でこそ「現出」しないものの、判断などで同種の他者と関係づけられ共通性を見だされるに先だって――少なくとも「今」は見出されず――「存在する」のだとすれば、これをヴィトゲンシュタインのように家族的類似（『哲学探求』一部七一節）の事例として解釈することもできるだろう（「考えるな、見よ」）。

その場合にも確かに感性に対し構想力や概念は大きな自由を有している。平行線を引いてこれに理念的意味を求めるとき、人はそこにユークリッド幾何学を構想することも非ユークリッド幾何学を構想することも可能である。しかしながら天体の運動などをはじめとして自然現象を観察するとなれば、私たちはさしあたって天動説を主張することも地動説を主張することも可能であるものの、人類が感覚与件から出発して観測の精密性を向上させていった暁にケプラーは僅か一桁の計算精度の差で新たな世界理解に達したという事実を等閑に付すわけにはいかない。同様に宵の明星の習慣的な統覚の枠組みの外で暁の明星が瞬く体験から、D・ラエルティウスが伝えるパルメニデスも両者の自己同一的存在を発見したはずである。無限に開かれた感性（第一次内容）は理念の外にあっても「存在する」し、理念の構成に先立つからこそ、ギリシア悲劇以来文学的に表現されてきた現実と人間的理想、有限理性との間のあらゆる葛藤のドラマが繰り広げられる。「外的」感性が問題となる限り、このことは射影の概念とともに第一次内容の概念が新たな角度から現象概念として見直される必要を示している。

したがってフッサールは正しく理解された「外的」感性にひとつの空間性を認め、またこれに特別な意味で「志向性」を認めることもできたであろう[9]。本節の考察から明らかとなるのは一般に感覚と理性的認識との関係について新たな理解が必要であり、カントの感性論や現象概念ばかりでなく、ヒュレーの現象学的概念もそのままでは支持できないということである。しかも外的感性について内と外との相違を否定す

る見解が元来マッハの非還元主義的現象主義に依拠するものであったとすれば、感覚される、あるいは端的に直観される個別的存在に対して、幾何学その他の学問の歴史を含む歴史文化的限定の担い手である「反省内容」の規定(一)は、それだけでは専ら自我の「色メガネ」による意味付与、すなわち依然として実証的態度以前の中世的精神の段階に相当する観念的解釈の境位をあらわしていることになる。この点『論研』自体――「第一次内容」の概念を最も評価するレヴィナスもこの点を強調していたように――知覚されるにせよ言語的に思念されるにせよハイデガーにとって本質的な範疇的意味を裸の個体が纏う「衣装」(LUII/6,§49,S.687)として性格づけていたことは肯綮に当たる。だがデカルト主義的な『イデーン』第一巻の構想では、志向的対象が様々な与えられ方において理念的意味を規定される際の基体となる「空虚なx」がいわば自分自身に対する記号として認められたものの、『論研』の現象概念に深さ、奥行きの次元を与えていた感性と悟性の関係の特有の図式は放棄される。陰影とともに感受される個別的な差異は全てを自らの光で照らす現象学的自我によって理念的意味の差異へと還元され、専ら能動的な意味付与の担い手たるコギトの現象学に主観的観念論の性格が窺われる。しかしながら感覚から出発する現象学的体験の概念は哲学と諸科学の前提であると同時に、元来これらに還元することのできる以上のものを蔵している可能性を否定することはできないのではないだろうか。

このように考えるならば、『論研』は思惟経済説などを批判して論理主義を擁護しながらも、アプリオリな論定を避けて「第一次内容」から出発したその思想の基底において、生得的かつ後天的模写を想定するマッハの現象主義の立場に踏み止まっていたものと了解することができる。またそうであるとすれば、これを単に観念論的、あるいは実在論的と評するだけでは表面的理解にとどまることも明らかであろう。

本稿は『論研』における観念論的契機にとどまらず、従来の理解に照らせば例外的とも見なされかねない経験論的契機を抽出し、そこに含意される「事象そのもの」の意味をあらためて問いなおしたことから、「中道」の立場(Hu18[LUI]§§43,20)を標榜する現象学が心理学主義を批判するだけでなく、記述心理学的立場において経験論の伝統から学んでいることをも確かめた[10]。現象学の成立のみならずその本質や思想的変遷を理解するうえでも最も重要なこの著作は、私たちに次のことを教えている。独自の意味の理論や論理学を追求する現象学の超越論的構成の概念――これについて『論研』第六研究で言及されるカントのテーゼと関連して提出された特別の問いがハイデガーの存在論的な問いであった――が、経験の質料的制約(感覚)とともに現実性そのものを喪失し

て主観的観念論に陥る危険を免れ得るとすれば、それは代表表象理論に一つの立脚点を見いだしながら記述をすすめたこの最初の現象学が、カントの構想力の概念ではなくマッハの現象主義の立場を基底として構想されたことに負うのである。

注

(1) Hermann Lübbe, *Bewußtsein in Geschichten. Zur Phänomenologie der Subjektivität Mach - Husserl - Schapp - Wittgenstein*, Freiburg, 1972.『歴史における意識：主観性の現象学のための研究：マッハ フッサール シャップ ウィトゲンシュタイン』(川島秀一ほか訳、京都 一九八八年)。

(2) Manfred Sommer, *Husserl und der frühe Positivismus*, Frankfurt am Main, 1985.

(3) 初版は一九三六年。以下でフッサール全集版(*Husserliana* 1950-)に収められた著作の引用箇所や参照箇所の指示を行う場合には全集版の略号(Hu: *Husserliana*)とともに巻数を示すか以下の略号を用い、これにページ数または当該の節などを付記する。K: 第六巻 *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie*. FTL: 第一七巻 *Formale und transzendentale Logik* [1929]. LUII: 第一九巻 *Logische Untersuchungen Zweiter Band* [1901].『論理学研究』第六研究はLUII/6で示し、引用は次の邦訳による。『論理学研究』4(立松弘孝訳、東京 一九七六年)。ただし初版の訳が示されている箇所はこれを採用し、然らざる場合は変更を加えた。

(4) 例えばMichael T.Ghiselin, "A radical solution to the species problem", in: *Systematic Zoology* 23(1974), 536-544. また生きた個体の科学的記述を尽くすことの不可能とともに、現代の遺伝学や免疫学は、個体化の問題に新たな光をなげかけている。雑種の問題はすでに『イデーン』期のフッサールを悩ませるものでもあった。一方M・ミードの旧・文化とパーソナリティ研究やレヴィ・ストロースの構造主義の観点とは対照的に、文化の一様性の複写モデルを批判して多様性の組織体モデルを提出したAnthony F.C.Wallace, *Culture and Personality* (1961)は個人を構造に還元することの不可能を指摘している。

(5) 引用箇所の最後の部分は第二版では次のようになっている。「…現出する事物は体験された感覚複合が客観的に統覚されて初めて志向的に構成されるのである。」

(6) この点については現象学という用語の直接の源泉がマッハにあることを初めとして一連の歴史的考察を著しておられる木田元氏の所見をも参照されたい。『マッハとニーチェ——世紀転換期思想史』(東京 二〇〇二年)。

(7) E・マッハ『感覚の分析』須藤吾之助、廣松渉訳(東京 一九七一年)三四三頁。

(8) これはある角度からメルロ＝ポンティの実存主義における自由の概念を先取りする視点ともなっていることに注意されたい。

(9) E・シュトラウスの業績(*Vom Sinn der Sinne*, 1935)と同様、メルロ＝ポンティの現象学もこの点の承認を前提する。Vgl. Hu3, §41. だが一九〇七年の『物と空間』講義(Hu16)も空間は理念性として構成されるものであると考える観念論的立場を示している。

(10) フッサールはわけてもヒュームの 'relations of ideas' に多くを負うが、同時に 'matters of fact' との区別も念頭にあったはずであろう。個体の知覚に関しても現象学がこの区別の所以を等閑にしてよい謂れはない。後年の生活世界論では、経験と帰納、特に経験可能性の帰納的先取ということに、大きな役割が認められるに至っている(K, §34, d. Anm.)。

(いたくらよしひこ　ルーヴァン大学博士課程修了)